

令和元年度（第63回）
岩手県教育研究会発表資料

【道徳分科会】

「豊かな心の育成」に関する研究
～道徳教育のマネジメントを通して～

令和2年2月14日
岩手大学大学院教育学研究科
学校マネジメント力開発プログラム
町畑光明

I はじめに

1 研究の目的

本研究の目的は、「豊かな心の育成」に深く関わる道徳教育について、A県内の小学校における現状と課題を把握し、その課題解決に向けた道徳教育のマネジメントの在り方について提言することである。

なお、本研究では、道徳教育のマネジメントを「道徳教育の実践力を高めるマネジメント」と「まなびフェスト達成に向けた道徳教育の実践化を図るマネジメント」の2つとする。

2 主題設定の理由

『学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』（文部科学省 2017）では、「道徳教育を通じて育成される道徳性、とりわけ、内省しつつ物事の本質を考える力や何事にも主体性をもって誠実に向き合う意志や態度、豊かな情操などは、『豊かな心』だけでなく、『確かな学力』や『健やかな体』の基盤ともなり、『生きる力』を育むために極めて重要なものである」としている。また、『いわて県民計画(2019～2028)第1期アクションプラン』（岩手県 2019）、『岩手県教育振興計画』（岩手県教育委員会 2019）や『2019年度学校教育指導指針』（岩手県教育委員会 2019）でも、これまで同様に「豊かな心の育成」に道徳教育の充実が求められている。

Society5.0の時代に向かう中、今後、さらに複雑化する社会をよりよく生きていく上で、児童の道徳性を養うことは極めて重要なことである。そのために、学校においては、児童の「豊かな心の育成」に向けた計画的・組織的な道徳教育のマネジメントが必要であると考え、本主題を設定した。

3 先行研究

本研究の目的に迫るための前提として、道徳教育のマネジメント、道徳科の評価、道徳教育の推進の3つの視点から先行研究をみていく。

道徳教育のマネジメントについて、宮地（2010）は、道徳教育推進教師の役割を推進・調整・支援の3つの観点で具体化し教職員や校内組織に関わることで、教員や各校内組織の動きが具体化したり主体的な取組が促されたりしたと述べている。また、濱田（2018）は、中学校において学年団でT1を交代しながら学年団の全ての教職員で指導に当たるようにしたことで、スパイラルに授業改善が図られるとともに、生徒の成長の評価へとつなげていくことができると感じた述べている。

道徳科の評価について、赤瀬（2018）は、「道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか」「児童が一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させているか」「発言や記述ではない形で表出する児童の様子」の視点から作成した評価フォーマットにより、それぞれの視点で見取った内容を評価として文章にまとめることができた述べている。また、中山（2017）は、生徒に自己評価の大まかなルーブリックを示した上で、5段階の尺度による自己評価を記録しデータとして管理・分析し、それを記述式の評価に生かす評価の在り方を提案している。

道徳教育の推進について、矢作・押谷（2017）は、スクール・マネジメントの中核に道徳教育を据えた総合道徳プロジェクトを構想し、それに基づき実践した研究では、児童の道徳性の変容や学校機能の活性化を図ることができたことから一定の成果がみられたと述べている。また、岩手大学教育学部附属中学校（2019）の『2019年度学校公開教育研究会中間発表会 特別の教科 道徳』では、総合的な学習の時間や行事に向かって「ユニット」を組むことで学びを深めることをねらいとしていると述べている。

以上のことから、本研究の目的に迫るために、先行研究の成果と課題を踏まえ、研究の視点として、道徳科の授業づくり、道徳科の研修、道徳教育とまなびフェストの関連の3点を設定し、道徳教育のマネジメントの在り方について検討していくこととした。

II A県内の小学校における「豊かな心の育成」に関する調査

1 調査の目的と内容

本調査では、「豊かな心の育成」に関わる道徳教育の現状と課題、道徳教育とまなびフェストとの関連を把握し、道徳教育のマネジメントの在り方を検討することを目的として、A県内の小学校における道徳教育の推進やまなびフェストとの関連について6件法による意識調査、取組内容や課題等についての選択肢及び自由記述による調査を実施した。

2 調査対象

A県内全域の公立小学校から各教育事務所を網羅するように考慮し無作為に抽出した89校の管理職、道徳教育推進教師、担任等を対象に平成31年3月に調査を実施した。

3 道徳科の授業改善と研修についての意識調査

(1) 担任等を対象とした道徳科の授業改善及び研修の意識の違い

道徳科の授業改善と研修について担任等を対象に、「6：強くそう思う」「5：かなりそう思う」などの6件法による意識調査を行った。

図1は、それぞれの調査項目ごとに学校規模により平均の値を求め、グラフ化したものである。全体の平均の大きい調査項目から並べてある。なお、学校規模は、19学級以上、12～18学級、6～11学級、5学級以下の4つに分けている。

これらの結果から、学校規模による意識の違いを平均の値及び、その差をグラフから読み取ることができる。「道徳科の授業改善の意識」については、学校規模に関わらず、4.5前後になっている。これは、道徳の教科化に伴い授業改善の必要性を感じていることが理由として考えられる。しかし、「授業改善の手応え」は、学校規模を問わず「やや、そう

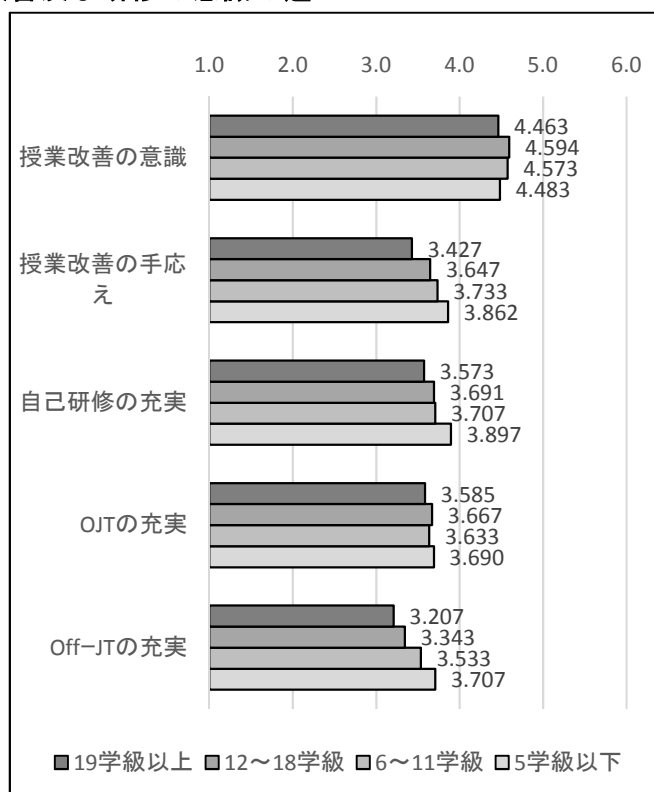


図1 担任等を対象とした道徳科の授業改善及び研修の意識の違い

思う」の4.0に届かず、授業改善が十分に進んでいないと考えられる。また、授業改善を支える研修についても、自己研修、OJT、Off-JT 全てにおいて、学校規模を問わず4.0に届いておらず、研修に対しても充実感を十分に持てないでいることが考えられる。

(2) 学校規模による道徳科の授業改善及び研修の意識の違い

学校規模の違いによる差を把握するために、それぞれの学校規模の平均の値の違いを分散分析により検討した。さらに有意差がみられた調査項目については、学校規模の違いを把握するために、Holm法による多重比較を実施した。表1はその結果である。なお、本論のデータ分析は、清水（2016）によるHADを用いた。

分散分析の結果から、「授業改善の手応え」と「Off-JT の充実」は5%の危険率で有意な差があった。さらに、多重比較を実施したところ、結果として、「授業改善の手応え」では、5学級以下と6～11学級が、19学級以上より5%の危険率で有意に高くなった。「Off-JT の充実」では、5学級以下が、19学級以上より5%の危険率で有意に高くなった。これは、学校規模が小さいほど、児童の実態に応じた授業が構想しやすいことや日常の授業準備や学級事務等に割く時間が少なくなることが要因の一つとして考えられる。また、学校規模は、校外研修への参加の容易さも少なからず影響があると考えられる。

表1 学校規模による道徳科の授業改善及び研修の意識 比較（分散分析）

	F値	p値	多重比較（Holm法）
授業改善の手応え	3.465	.016 *	3>1, 4>1
Off-JTの充実	3.382	.018 *	4>1

多重比較の表記 1：19学級以上 2：12～18学級 3：6～11学級 4：5学級以下

**： $p < .01$ *： $p < .05$ >>： $p < .01$ >： $p < .05$

4 まなびフェストや道徳教育についての調査

(1) まなびフェストや道徳教育の推進上の課題

まなびフェストの取組や道徳教育の推進上の課題について、管理職、道徳教育推進教師、担任等を対象に自由記述による調査を行った。樋口（2014）のKHコーダーによる計量テキスト分析を行い、中心性（媒介）検出による共起ネットワークの図2を描いた。

実線の部分には、「道徳、授業、在り方、意識」や「指導、評価、難しい」が多く抽出され、「道徳科の授業の在り方や授業への意識」や「道徳科の指導や評価の難しさ」が読み取れた。

点線の部分には、「道徳教育、まなびフェスト、関連」が多く抽出され、「道徳教育とまなびフェストの関連」に課題があることが読み取れた。

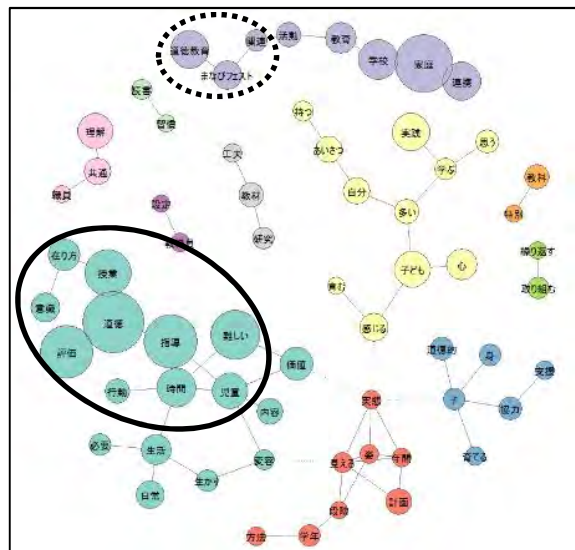


図2 まなびフェストや道徳教育の推進上の課題の共起ネットワーク

(2) まなびフェストや道徳教育の見取りの課題

まなびフェストや道徳教育の見取りの課題について、(1)と同様に調査、分析したところ、共起ネットワークは、図3のようになった。

実線の部分には、「児童、変容、見取り、見取る、評価、難しい」が抽出され、「児童の変容を見取ったり、評価したりすることの難しさ」が読み取れた。

5 調査結果の考察

調査結果から、道徳科については、研修の機会が少なく、授業づくりや評価に難しさを感じている教員が多いこと、まなびフェストと道徳教育については、これらに関連させた取組や道徳科同様に見取りや評価について課題意識があることがわかった。

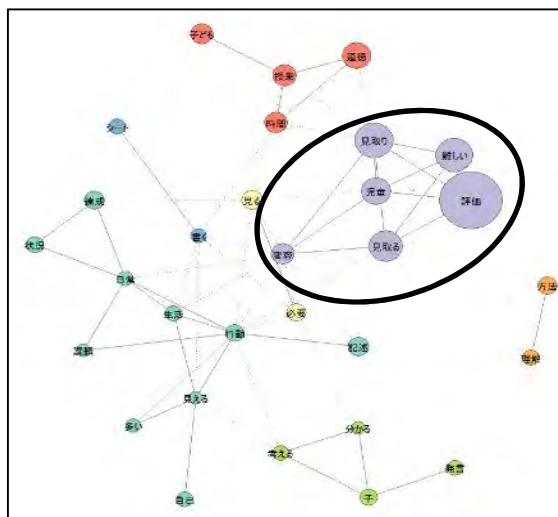


図3 まなびフェストや道徳教育の見取りの課題の共起ネットワーク

III 道徳教育のマネジメントによる実践と成果の検証

1 道徳教育の実践力を高めるマネジメントの実践

「道徳教育の実践力を高めるマネジメント」として道徳科の評価の研修会とOJTによる授業改善の研修を連携協力校で実施し、その成果を検証した。

(1) 道徳科の評価の研修会

この研修会のねらいは、A県内の小学校で明らかになった道徳科の評価及び所見に対する難しさについて、研修会を実施することにより評価や所見の具体的なイメージを持つことで、これらの難しさに対する意識の改善を図ることである。

① 研修会前後の道徳科の評価と所見に対する意識

研修会終了後、担任を対象に「道徳科の評価の難しさ」「道徳科の所見の難しさ」についての6件法による意識調査を実施し、研修会前との意識の違いについてt検定を実施したところ、結果は表2のようになった。

表2 研修会前後の道徳科の評価と所見についての意識 比較

	研修会前	研修会后	差	効果量 <i>d</i>	<i>t</i> 値	df	<i>p</i> 値	
道徳科の所見の難しさ	4.550	3.611	-0.939	.929	2.907	34.604	.006	**
道徳科の評価の難しさ	4.650	3.889	-0.761	.871	2.702	31.948	.011	*

**: $p < .01$ *: $p < .05$

「道徳科の所見の難しさ」が1%、「道徳科の評価の難しさ」が5%の危険率で有意に低くなり、この研修会が評価や所見の難しさの軽減に効果があったと考えられる。

今回の研修では、特に道徳科の所見に対する難しさの意識が改善されている。これは、赤瀬(2018)の「小学校道徳科における評価の在り方に関する研究」を取り上げたことが大きく関わっていると考える。この研究の中で紹介されている「評価フォーマット」には、道徳科の評価の視点や見取りのポイント、具体的な児童の発言や記述の内容、それ以外の形で表出する児童の様子と、それに対応する評価記述例(所見例)が示されている。これを用いて、児童の見取りから記述による評価文を作成する演習を通して、所見作成のイメージを持つことができたと考えられる。

(2) OJTによる授業改善の研修

この研修会のねらいは、A県内の小学校で明らかになった「道徳科の授業改善の意識は高いが、その手応えを実感できていない」という現状から、OJTによる授業改善の研修の一つとして、ローテーション道徳に取り組むこととした。ローテーション道徳とは、一人の担任が、学級を換えて同一教材で複数回行う授業のことである。

① ローテーション道徳に対する児童の意識

図4は、各授業終了後に児童を対象に行ったローテーション道徳に対する意識調査である。調査は、「5：とても思う」「4：そう思う」などの5件法で行った。

組ごとの多重比較では、「今日の授業は新鮮な気持ちで学習できましたか」では、1組が2組（授業者は2組担任）より5%の危険率で有意に高くなり、その他に有意な差はなかった。このことから、普段にはない担任以外の教師による授業は児童に新鮮な感覚を与え、一生懸命考え本時の内容項目の価値を実感できたと考えることができる。

このことから担任以外の教師による授業は、4年生の児童にとっては学習意欲を高め主体的な学習を促す効果があると考えられる。

② ローテーション道徳に対する実施学年担任の意識

表3は、学年担任による道徳科とローテーション道徳に対する実施前後の意識である。6件法で実施している。

「考え、議論する道徳のイメージが持てない」では、平均の値が-2.00と難しさの意識が改善されたと考える。また、「ローテーション道徳は、有効である」では、平均の値が+1.67で、「6：強くそう思う」、「5：かなりそう思う」と効果を感じていることがわかった。

しかし、自習を解消する等の配慮がないと負担感は大きく、実施面の課題は残った。

2 まなびフェスト達成に向けた道徳教育の実践化を図るマネジメントの実施

(1) 学校行事とまなびフェストを関連させる意図

「がんばりシート」は、学校行事の取組にまなびフェストの視点を反映させ、児童のまなびフェストの意識を高めることと児童の活動の様子を担任が見取る手立てとすることをねらいとしたものである。学校行事のねらいには、まなびフェストと関わる内容が含まれていることが多く、他者との協働による実践を通じて自他のよさや成長を実感できるように指導に当たるため、児童はまなびフェストを強く意識することができる。

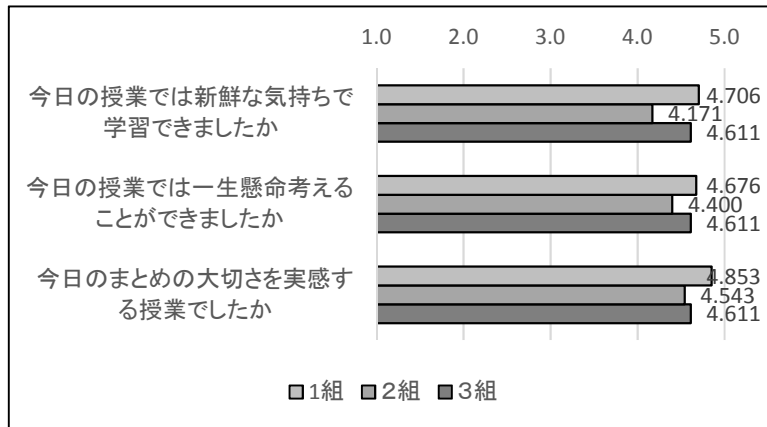


図4 ローテーション道徳に対する児童の意識

表3 学年担任による道徳科とローテーション道徳に対する実施前後の意識

質問	学級担任 ※2組担任は授業者	実施前	実施後	差	変化の平均
考え、議論する道徳のイメージが持てない	2組担任	5	3	-2	-2.00
	1組担任	5	2	-3	
	3組担任	5	4	-1	
ローテーション道徳は、有効である	2組担任	4	6	+2	+1.67
	1組担任	4	6	+2	
	3組担任	4	5	+1	

(2) 学校行事の実践を通じたがんばりシートの効果の検証

連携協力校において、グリーンキャンプ（第5学年）と音楽学習発表会（全校）の取組に「がんばりシート」の活用をお願いした。

① グリーンキャンプの実施とがんばりシートの結果の検証

7月に第5学年が行ったグリーンキャンプにおいて実施前後のまなびフェストに対する意識の違いについて t 検定を実施したところ、結果は表4のようになった。

表4 グリーンキャンプ前後におけるまなびフェストの意識 比較

	キャンプ前	キャンプ後	差	効果量 d	t 値	df	p 値	
あいさつ	4.180	4.733	0.553	.888	6.308	183.727	.000	**
よいところの発見	3.870	4.535	0.665	.824	5.858	187.343	.000	**
進んで取り組む	4.290	4.772	0.482	.698	4.955	168.577	.000	**
学校が楽しい	4.180	4.495	0.315	.348	2.472	184.257	.014	*

** $p < .01$ * $p < .05$

「学校が楽しい」が5%、それ以外が1%の危険率で有意な差がみられた。グリーンキャンプに向けた事前学習の充実とグリーンキャンプへの期待感が、あいさつや主体的な取組を促し、そのことが自他のよさの発見につながり、児童も達成感や満足感を得ることができたと考える。

② 音楽学習発表会の実施とがんばりシートの結果の検証

11月に行われた音楽学習発表会では、全校での活用をお願いした。発達段階を考慮して1～3年生用と4～6年生用のがんばりシートを作成した。

このシートを用いて、音楽学習発表会前後のまなびフェストに対する意識の違いについて t 検定を実施した。表5はその結果である。

表5 音楽学習発表会前後におけるまなびフェストの意識 比較

	音楽会前	音楽会后	差	効果量 d	t 値	df	p 値	
進んで取り組む 3年	4.340	4.881	0.542	.787	5.770	150.311	.000	**
4年	3.730	4.160	0.430	.423	3.002	197.714	.003	**
2年	4.656	4.851	0.195	.357	2.442	138.594	.016	*
よいところの発見 2年	4.075	4.447	0.372	.375	2.575	179.284	.011	*
あいさつ・返事 3年	4.689	4.851	0.163	.312	2.275	176.162	.024	*
学校が楽しい 6年	4.340	3.890	-0.450	.431	3.059	193.315	.003	**
5年	4.617	4.330	-0.287	.312	2.112	146.994	.036	*

** $p < .01$ * $p < .05$

「進んで取り組む」では、3年生、4年生が1%の危険率で、2年生は5%の危険率で有意差がみられた。「よいところの発見」では2年生が、「あいさつ・返事」については3年生が、それぞれ5%の危険率で有意差がみられた。しかし、反対に意識が低くなった項目もみられた。「学校が楽しい」では、6年生が1%の危険率で、5年生は5%の危険率で有意差がみられた。

次に、音楽学習発表会後のまなびフェストの意識について分散分析を行い、学年による多重比較をしたところ、結果は表6のようになった。顕著なこととして「あいさつ・返事」「進んで取り組む」といった「自分がすること」への自己評価に、1、2、3年生と4、5、6年生に有意な差があること、また、4、5、6年生でも学年が上がるにつれ自己評価の意識が低くなることあげられる。

表 6 音楽学習発表会後における学年間のまなびフェストの意識 比較（分散分析）

	F値	p値	多重比較 (Holm法)
あいさつ・返事	37.776	.000 **	1>>4, 1>>5, 1>>6, 2>>4, 2>>5, 2>>6, 3>>4, 3>>5, 3>>6, 4>>6, 5>>6
よさの発見	6.632	.000 **	5>>1, 5>>3, 4>1, 5>2
進んで取り組む	44.595	.000 **	1>>4, 1>>5, 1>>6, 2>>4, 2>>5, 2>>6, 3>>4, 3>>5, 3>>6, 4>>6, 5>6
学校が楽しい	7.812	.000 **	1>>6, 2>>6, 3>>6, 4>>6, 5>6

1:1年 2:2年 3:3年 4:4年 5:5年 6:6年
 **:p<.01 * :p<.05 >> : p<.01 > :p<.05

これらのことから、1、2、3年生では、自分のがんばりを素直にとらえ、4、5、6年生では、自己を省察する力が高まり批判的にとらえる傾向があると考えられる。教師の見取りと児童の評価に違いを感じる一因に、児童の発達段階の特性が考えられる。この傾向を踏まえて見取ることで、児童を認め励ます評価につながると考える。

IV 実践研究の成果と課題

1 成果

道徳科の評価の研修会では、評価と関わりの深い所見について合せて扱うことで、よりニーズに応じた研修を行うことができ、評価や所見に対する難しさの軽減につながった。先行研究の知見を積極的に活用することも満足度の高い研修につながると考える。

OJTによる授業改善の研修として行ったローテーション道徳の実践では、参観者から助言を受けることで、回を重ねるごとに授業者の教材研究が深まり、授業がブラッシュアップされ本時のねらいに迫ることができた。また、授業者、参観者ともに「考え、議論する道徳」のイメージが持てたと肯定的にとらえており、この研修は有効であったと考える。児童にとっての効果については、担任以外の教師では、児童の実態に応じた授業ができないのではないかという懸念があった。しかし、児童のアンケート結果をみると、担任以外の教師との授業を新鮮な気持ちで受けたことや授業のねらいを実感できたことなどの肯定的な回答が多いことから、4年生では、担任以外でも児童が主体的に学び、ねらいに迫る授業を実践できると考える。

がんばりシートの活用では、児童がまなびフェストを意識することや教師が児童の取組の様子を見取することに有効であると一定の評価を得られた。まなびフェストを意識した取組を計画的に実施することで、児童も教員も感覚的な自己評価から具体的で信頼性のある評価に近づくと考える。また、がんばりシートの活用から、行事の内容や学年の発達段階によって児童の自己評価に違いが生じることがわかった。この傾向を把握した上で指導や評価を行うことは、児童のよさやがんばりを認め励ますことにつながり、「豊かな心の育成」に寄与できると考える。

2 課題

研修を行うことにより道徳の評価に対する難しさの意識が改善されたが、日々の授業や学級事務、校務分掌等の業務や会議等で多忙な中に、いかに時間を確保し研修を組み入れ

ていくかに課題がある。また、小学校でのローテーション道德には、自習体制や補教等に課題が残る。これについては、担任外や専科の教員による授業を当てたり管理職や担任外が参観者となり助言を行ったりするといった対応が考えられる。がんばりシートの活用では、このシートの見取りが、まなびフェストの評価に直結するものではなく、多くの教師がもつまなびフェストの評価の難しさの解消には至っていない。

以上のことから、課題は残るものの、「道德教育の実践力を高めるマネジメント」と「まなびフェスト達成に向けた道德教育の実践化を図るマネジメント」を行うことで、調査結果から明らかになった、道德科の授業づくりや評価に対する難しさの改善、まなびフェストと道德教育を関連づけることや児童の見取りに成果があることを確認できた。

V おわりに

おわりに、本研究を通して明らかになったことをまとめるとともに、残された研究課題について示す。

「道德教育の実践力を高めるマネジメント」として行った道德科の評価の研修会や OJT による授業改善の研修、「まなびフェスト達成に向けた道德教育の実践化を図るマネジメント」として行ったまなびフェストと学校行事を関連させる取組は、A 県内の小学校で明らかになった課題の解決に一定の成果があることが明らかになった。

残された課題としては、業務改善の視点も含めた時間の確保の検討、まなびフェストの見取りや評価の在り方があげられる。そして、これらを改善していくために、職員に道德教育の重要性を浸透させるマネジメントの在り方があげられる。

【引用・参考文献】

- ・赤瀬光雄「小学校道德科における評価の在り方に関する研究～学習状況や道德性に係る成長の様子を評価の視点を基にして見取る評価方法を通して～」(『平成 29 年度岩手県立総合教育センター教育研究第 173 号』2018)
- ・岩手県「いわて県民計画 (2019～2028) 第 1 期アクションプラン (2019)」
- ・岩手県教育委員会「岩手県教育振興計画 (2019)」
- ・岩手県教育委員会「2019 年度学校教育指導指針 (幼稚園等・小学校・中学校・義務教育学校)」
- ・岩手大学教育学部附属中学校「2019 年度学校公開教育研究会中間発表会 研究総論」及び「道德科教科論」
- ・道德教育に係る評価等の在り方に関する専門会議「『特別の教科 道德』の指導方法・評価等について (報告)」(2016)
- ・中山芳明「道德における生徒の自己評価を生かした記述式評価と授業力の充実 (2 年次) ～生徒の真情に迫る道德の記述式による評価と授業力向上への手だて～」(『京都市総合教育センター平成 28 年度研究紀要』No. 582 2017)
- ・濱田安沙「中学校におけるカリキュラム・マネジメントを用いた道德教育に関する研究～指導計画の実質化及び学校・家庭・地域による連携を通して～」(高知県教育委員会大学院派遣教員研究報告書 2018)
- ・宮地真人「協働意識を高めることによる道德教育推進体制の改善・充実～道德教育推進教師がかかわる道德教育マネジメントの推進～」(『群馬県総合教育センター平成 22 年度長期研修員の研究報告書 242 集』2010)
- ・文部科学省『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示)』 (2017)
- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説 総則編』(2017)
- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道德編』(2017)
- ・矢作信行・押谷由夫「道德教育を中核としたスクール・マネジメントの研究」(『昭和女子大学近代文化研究所 学苑・初等教育学科紀要』No. 920 17～31 2017)

岩手大学大学院教育学研究科（平成30年度入学）

町 畑 光 明

所属プログラム

学校マネジメント力開発プログラム

担当教員 岩手大学大学院教育学研究科

教 授 遠 藤 孝 夫

教 授 鈴 木 久米男

特命教授 多 田 英 史

所属校

盛岡市立緑が丘小学校